

研究

佐伯方言雑話

賛助会員 山内 武 麒

まえがき

ずつと前、郷土史家佐藤蔵太郎先生の著した「南海部
 郡史」の巻末にしろされた「佐伯方言一斑」を讀んで、
 その中から、今でも聞いたたり、使ったりする言葉を取
 してみたことがある。その後、全国方言辞典へ東條操著
 東京堂出版）が手に入り、それを見ると私どもが現在使
 ている方言、また以前使っていた方言が、また深山ある
 ことを知って、改めて集めなおしてみたら、千五百余り
 の方言があった。

集めた方言の中には、方言であつても今日広い地域
 に通じる共通語になつてゐるものもあり、また、現在佐
 伯の人たちの口にはのぼらない過去の方言もある。

一つ一つの方言を色々吟味してゐると、その言葉に
 まつわる昔のなつかしい思い出が浮かんでくる。また語
 原を調べようと辞書を引いてゐると、いつの間にか辞書
 に引き込まれて、辞書遊びに夢中になつてしまふ。これ
 らを書き綴つたものに、おこがましくも「佐伯方言雑話」
 と題した。学問的研究といつたものでは決してない。夫
 だ興味を覚え、興味に引きずられて、辞書と首つ引きし
 ながら書き綴つたものである。

方言は口に出し、耳に聞いて其の味を知ることができ

る。私どもは、方言でなくては自分の意志や感情を、充
 分に言ひあらわせない場合がある。方言は、それぞれ
 の土地に根をおろしてゐる無形文化財であるといつてよ
 いのではあるまいか。幼ないころからのなつかしい思
 い出の中に耽溺させる風物詩であるといつても、決して
 過言ではあるまい。

あけどり

全国方言辞典に、あけどり、蜻蛉、とんぼ、大分県鶴
 岡——とある。これは佐伯市の鶴岡に違ひないと、早速、
 鶴岡生まれのS氏に、鶴岡でとんぼのことをあけどりと
 いうかどうか尋ねてみた。、「今あけどりなど言う人は
 ないが、昔の人は言つていた。子どもの頃聞いたことが
 ある」という返事があつた。今はほんでしまつた言葉
 であらうが、全国でたゞ一箇所、鶴岡だけの方言とは、
 まことに珍らしい話である。

どこからこの言葉が生まれたのか、その由を知るすべ
 もないが、古語では、とんぼのことを「あきつ」と呼ん
 で、秋津、蜻蛉と書いた。「あきづ」とも呼んでゐた。
 神武天皇が大和の國の室と国見をしたとき、「あきづの
 となめせるがごとし」とのたもうたことから、日本國の
 異称を「あきづくに」または「あきづくに」といい、「
 あきつしまね」ともいつた。

あけどりのはじまりは、とんぼを鳥と見たてて「あき
 つどり」と呼び、それが「あきどり」と約され、更に訛
 つてあけどりとなつたのではあるまいか。

あけなんこ

今はほとんど使われていないが、ありのままに、包み

かくさずには、という意味の方言である。「あけなんこに相談する」「あけなんこに何もかも申します」などというが、今は年寄の人か、浦まえの人達の間で持たま聞く。

あけなんこのあけは、あける（開ける）のあけであり、あけ（ばなし）のあけであって、秘密や心の中を包みかくさずさらけ出すことの意味であろう。

なんことば、昔、関東の方で子どもたちがやっていた遊戯の一つである。小石や細く折った杉箸などを、手のひらに握って差し出し、「なんこ、なんこ」と、相手とその数のあてっこをする遊びである。

あけなんこは、なんこをあける意味で、秘密なく、ありのままに、包みかくさずさらけ出すの意味となったのである。

あじろしい

孫の画いた絵や、作った工作品などを、眼を細めて見ていたおばあさんが、頬をほくろばせて「なかなかあじろしい、う出来とる」とほめる。このあじろしいという言葉は、今では滅多に聞くことばないが、純粋な佐伯方言で、できがよい、立派、の意である。

この、あじろしいの語原は何だらう。この語はあじといろしとが重なって出来たのではあるまいか。すなわち、あじいろしがあじろしと約され、それが口語化してあじろしいになったのではあるまいか。あじは味で、うまみ、おまむきの意であり、いろしはいろしの転で著しと書いて、きわだっている、はっきりしている、いちじろしい、あきらかである、の意である。

あじろしいは、著名な大家の作品などをほめる言葉としては使われないで、むしろ子ども達の見事な演技や作品の

出来栄を見て、その可憐さを称える場合に引いてくる言葉である。この言葉は目、床しさと微笑みしさが含まれて、味わい深いものを感じる。大事にとっておきたい言葉である。

いげちねえといげつねえ

いげちねえといげつねえとは、ちとつが異なるだけで意味が大きく違う。

いげちねえは、いじらしい、かわいそう、という意味で佐伯独特の方言である。佐伯でも浦まえの人たちがよく使う言葉である。

いげつねえはえげつねえとも言い、けちん坊で情け知らず、の意である。「あいつはいげつねえ奴ぢや」と言えは、薄情で意地悪な人に対する悪口である。

いげちねえもいげつねえも、もととは同じ言葉であって、同情心に乏しい、利彼の心が深い、人情に乏しい、薄情である、の意であるが、薄情な仕打ちをさされて泣いているものを、いじらしく思う同情心も、この語で表現されるようになった。いげちねえに常用されたのではあるまいか。

いげちねえと同様の言葉を殺せねばならぬような、いげつねえ行為がなくなつたら、どれほど住みよい世の中になるだらう。

いさらがい

いさらがいは小少女巻貝で、普通やさらといつて、このまの遊びに用いる貝である。いさらがいはもやさらも方言であるが、本当の名はネギと云う。

いさらがいは、美しい模様のある巻貝である。うす紅色や卵色の地に、青や茶色の斑点模様があつたり、鮮や

かな青紫色を深めたようなものもある。どれもつやつやと磨いたような光沢があり、遊具として申し分のない代物である。

冬の日、暖かい日差しを受け左縁側で、女の子が寄り合ってゆきら遊びをしていた昔のことを思い出す。手のひらにこの美しい貝を一杯のせ、調子をつけて手をあげつつ貝と上に放り、くるっと手のひらを返して、手き下げつつ貝を手の甲にうける。そしてまた上に放って手のひらでうける。この動作が、しなやかな女の指はよく左わり、僅か落とすだけで、殆んどの貝から握りこむのだから、絶妙の手練である。

いさらがいという呼び名は、いかにも優雅なひびきがある。それこそその筈、いさらは古語で、平安時代の文学によく出ている大和ことばである。いさらは襟頭辞で、小さい、少しの、細いの意をあらわす。

いたじきばらい

家で婚嫁などの大きな祝いごとがあり、無事にすんだ翌日に行われる慰勞の酒盛りを、いたじきばらいという。今はこんなことをすると、四五日前から一家着流はもちろん、隣近所の人達が手伝いに馳せ参じ、料理の何から何まで一切を調理するのである。膳梳は先祖代々からの定紋つきの什器と土蔵から出して使うのである。魚をほじめ諸材料の買出しまで、その清苦は並大抵でない。料理人は専問の職人を雇う時もあるが、大概どこの部落にも、素人ながらその道のベテランがいて、采配をふるっていた。蒲鉾づくりから羊羹作りまで、何も彼も調理するものである。広い台所もこの時はかりは、狭くて足のふみ場もない。それで土間も椽先にも板をならべて、急造の

板間を作って、大勢の手伝いの人たちが、てんでに料理して行くのである。

すんだ翌日は、その後片附けが大変であった。そして一通り始末すると、手伝いの人達への慰勞の酒盛りをする。これがいたじきばらいである。急造りの板敷をとりはらうの意である。

いらばかす

いらばかすは、だます、からかう、愚弄するの意に使う方言である。「いらばかされた」と腹を立てて怒るときもあるし、「うまくいらばかされた」といふように、何かにまぎらせること、すかしなだめる、の意にも使っている。このいらばかすは、ばかすの上には、いらを冠した言葉である。ばかすは化す、魅すと書いて、人の心を迷わせる、だます、たぶらかす、の意である。いらは昔と書き、かどが立つ、甚だしい、ひどい、の意味をあらわす。接頭辞である。それで、いらばかすは甚だしくだます、ひどくだますの意味のことばである。人をうまくだましたり、からかったりすることが、この言葉の意味になるのである。

うらまえ

浦辺、すなわち漁村のことをうらまえという。このうらまへの語原は、古語のうらまである。辞書を見ると、うらまはうらみと同じで、宇良末(うらみ)の末き末と書き換って宇良末と書いて、うらまよんだのである。うらま、うらみは浦曲、浦廻と書いて、三つの意がある。

- 一、浦辺の曲って入りこんだところ、海岸の曲りくねったところ。ふらふらという。
- 二、海岸をめぐりながら進むこと。岸辺に沿って廻ること。
- 三、ふらふらを恨みにかけて使うかかりことば。ふらふらは、うらまにえがついて出来たのに間違いない。古語の香り高い佐伯方言の一つである。

えば

えばということばは、ばにアクセントをつけるかつかないで、その意味ががらりと違う。

ばにアクセントがついたえばは、石工のことばで、これは佐伯だけの方言である。今はコンクリ屋さんになって、えばさんば少ない。家を新築するとき、先ずコンクリ屋が土台のコンクリートを打込むことから始まるが、昔はえばが土台石をすえることから始まった。大小さまざまな石を運び込み、上を振り石をけずって坐りよく築いていくのである。古い蔵家に行くと、土蔵にはこのえばの手でつくられた見事な基礎を見ることがある。頑丈に、隙間なく築き、堅い真石が磨かれたような平面を見せて、あたかも芸術作品を見るようだ。その外旧家の石塀にも、今なおびくともしないで美しい姿を残しているものがある。

ばにアクセントがつかないえばは、蜘蛛の巣である。「ふらのえばにとんぼかひつかかった」、「ふらのえばが頬にかかって気持ちがわるい」などという。このえばはそのもの特徴からくる感じからか、ねばりつくような語感がある。

おこつる

おこつるは、だます、きそう、おびき出す、嘲弄する、からかう、などの意があるが、佐伯では、からかつておびき出すことをいう。「出てこい。出てこい。この弱虫」などとおこつるは、相手を怒らせる。

このおこつるは、古語のせこつるである。せこつるは「誘ふ」と書き、その語原は、招き釣るであるという。すかし欺く、だまして人を誘う、利き与えて誘う、誘惑する、の意があり、また転じて、きげんを取るの意がある。

おこつるは、古語のせこつるが、今の世までそのまゝの形で残り、今もなお佐伯人が口にしてる言葉である。

おひなり

おひなりは、おひんなりともいう。これは朝の挨拶のことばで、「お早よう」と同じである。佐伯独特の方言であるが、市街部の人は使わず、主に農村部の人たちが使っていたそうである。今でも年寄りの人が「おひなりでございませう」と朝の挨拶をしているのを聞くことがあるそうである。

このおひなりとおひんなりは、古語の「おひなる」から出た言葉であるのに間違いない。おひなるは御盛成ると書き、朝、取れから賞めることの尊敬語である。お目ごめになる。お起きになるの意で、おひる、おひんなるともいう。中務内侍日記に「御所に御人すくななりつれば、おひなるより先といそぎ参りなれば」とある。

平安の昔、大宮人が使っていたみみやびやかな大和ことばが、そのまま残って、朝の挨拶として使われたとは、ゆかしい話である。しかもそれが、佐伯地方だけに受け継がれたとは、まことに奇異である。耳にはおかしな言葉ではあるが、歴史的にはまことに面白い。